

滋賀の文化情報誌
デュエット

Duet

2023 秋 vol.147

特集

マーチャントミュージアム 教林坊別院

猪日書院窓

新撰 淡海木間撰 90

二挺天符櫓時計 伝彦根城槻御殿什物

INFORMATION STATION 催し案内 2023 秋

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

特集

マーチャントミュージアム 教林坊別院

茶会の待合として建てられたという新寮からは、奥庭をはさんで向かいの茶室「槐庵」へ飛石が続く

今年4月、東近江市の松居久右衛門旧宅を改修したマーチャントミュージアム（商人博物館）がオープンしました。近江八幡市の教林坊に続き、長く無人で、取り壊しも検討されていた廃屋を復活させた廣部光信館長に館内をご案内いただきました。

館正面の表門。手前の川に面したカワト（洗い場）も登録有形文化財



マーチャントミュージアム 教林坊別院

住 所 東近江市五箇荘竜田町396-1

連絡先 TEL 090-3055-8183

開館日 4～6、10月の土日祝日、11月1日～12月初旬の毎日
2月の五箇荘「商家に伝わるひな人形めぐり」期間中の土日祝日

入館料 大人500円、小中学生200円

駐車場 館前に障害者専用駐車場。一般車は近江商人博物館駐車場へ（徒歩6分）

アクセス JR 琵琶湖線「能登川駅」から近江鉄道バス「八日市駅行き」で「金堂竜田口」下車、徒歩12分／近江鉄道「五箇荘駅」下車、徒歩17分

取材／編集部 写真／辻村耕司



将来の構想は何もなかったんです。 何とかして後世に残そうというだけで。

マーチャントミュージアム館長・キュレーター 廣部光信さん

近江商人の旧宅だった空き家を15年かけて修復

— 廣部さんは、ご出身が安土町石寺でよろしいのですか。

廣部 教林坊がある近江八幡市安土町石寺の光善寺という天台宗寺院で生まれました。こちらの別院の前に、**まず教林坊を復興なさったんですね。**

廣部 教林坊は聖徳太子の創建と伝わる天台宗の古刹で、小堀遠州作と伝わる庭園でも知られていました。ところが、60年余り前にご住職が亡くなり、しばらく奥さんが坊主として管理されていましたが、その方も亡くなり、その後、無住となりました。

平成7年（1995）、私は大学卒業後、天台宗の僧侶養成学校で2年学び、天台宗務庁に就職しました。その年の春に、家から歩いて10分ほどの教林坊に改めて訪れたところ、不思議なことですが、廃墟のような荒れ寺が観音浄土のように思われ、復興を決意しました。

そこから大変苦労しましたが、思いきって平成15年（2003）3月に天台宗務庁

を退職し、地元の方々の協力もあって、翌年4月に教林坊を一般公開に漕ぎ着けました。

— そして、再び無人となって荒れていた松居久右衛門旧宅の復興に取り組まれたわけですね。

廣部 教林坊の一般公開を始めて、まずはお寺のファンをつくる必要があると考え、コンサートや紅葉のライトアップ、地元の茶道の先生を招いてお茶会などをするようになりました。その一環として桃山時代からの香道具が残されていたことから「教林坊流」という香道の新流派を立ち上げました。

ある日、香道大師範の熊谷光遠さんから電話がかかってきました。

「実は五個荘にひどく荒れた近江商人のお宅があるんですけど、教林坊をあられだけ見事に復興されたのでしたら、そちらもおできになるんじゃないませんか」とおっしゃるんです。

もとは、家の増改築を依頼なさった設計士さんからお聞きになった話だそうです。巡り巡って私のところに持ち込まれたわけです。

— 松居家のご子孫の方はどちらにいらっしゃるのですか。

廣部 ご子孫は京都にいらっしゃ

教林坊

住所 近江八幡市安土町石寺1145 連絡先 TEL 0748(46)5400

公開時期 4～5月の土・日・祝日、11月1日～12月10日の毎日

アクセス 名神竜王ICから車で20分／JR安土駅からタクシーで10分

※1 天台宗務庁 天台宗の寺院を包括する宗教法人「天台宗」の事務所。大津市坂本に所在。
※2 松居久右衛門 初代が江戸時代初期に摂津・播磨方面への行商で基礎を築いた近江商人。松居久左衛門は分家にあたる。

います。もう取り壊してアパートや公園にするといった話もあったそうですが、先祖伝来のものなので、そのままの形で残してくださる方に引き継いでいただきたいということでした。

そこで、私にやらせてくださいと、平成20年（2008）にお譲りいただいたわけです。

— 仏教とはまったく関係ないわけですね。

廣部 そうです。最初の出発点としては貴重な文化遺産を残そうというところですが、結局15年かけて修復して、ようやく今年の4月に開館することができました。

40年近く空き家だったので、最初は本当



マーチャントミュージアム
館長・キュレーター

廣部光信さん

ひろべ こうしん／1971年、
近江八幡市生まれ。教林坊住職。



にひどい状態でした。ゴミが散乱していて、蔵に入ることはできなかったようですが、泥棒も何度か入っていたようです。

雨漏れがして、シロアリはいるし。茶室にあたる建物の天井などは全体が落ちてしまっていました。しかし、お金がありません。じゃあ、どうするかなんですが、仕方がないので、できる所は全部自分で修復を始めました。

「**教林坊を改修した際も、ご自身でも大工仕事をなさったそうですが、どこで学ばれたのですか。**」

廣部 どこでも、学んでいないんですよ。見よう見まねです。専門業者に依頼すれば、とんでもない費用がかかるものですから。かといって、新建材で簡単に済ませるわけにもいかないので、残せるものは残して、できるだけ文化的な修復を心がけてきました。

「**当初から博物館にするお考えで……。**」

廣部 修復作業を10年余り続けてきて、ようやく令和3年（2021）10月に主屋をはじめとする13の建造物が国の登録有形文化財になりました。

「**松居旧宅は「松樹館」と呼ばれていたのですね。**」

廣部 江戸時代、松居家があった村は神崎郡位田村といましたが、明治12年（1879）に隣の市田村と合併して竜田村になりました。両村とも、もともとは彦根藩領だったのですが、桜田門外の変で彦根藩が10万石の減封となったため、慶応元年（1865）から2年間だけ、賀陽宮（のちの久邇宮）の領地になりました。

その時に、久邇宮朝彦親王から「松樹」と書いた扁額を贈られたので、「松樹館」と呼ぶようになったようです。

松居久右衛門旧宅の登録有形文化財と登録記念物

登録有形文化財（建造物）

	名称	建設年代
①	松樹館主屋	文化11年(1814)／平成27年(2015)改修
②	松樹館新建	明治6年(1873)／大正前期改修
③	松樹館小屋	明治前期(1868～1882)
④	松樹館廊下座敷	大正前期(1912～1918)
⑤	松樹館新 寮	昭和8年(1933)
⑥	松樹館文庫蔵	文政12年(1829)
⑦	松樹館南蔵	江戸後期(1751～1830)
⑧	松樹館北蔵	寛政12年(1800)／江戸末期改修
⑨	松樹館米蔵	万延元年(1860)
⑩	松樹館新蔵	慶応元年(1865)
⑪	松樹館長屋	昭和前期(1926～1945)
⑫	松樹館表門及び塀	大正7年(1918)
⑬	松樹館力ワト	大正前期(1912～1918)

登録記念物

①	松樹館庭園	明治時代
---	-------	------

丸数字は7ページの平面図中の丸数字に対応

文化財に、庭園が国の登録記念物になりました。〔表参照〕

もともとこの制度自体が保存と同時に登録された文化財をまちづくりなどへ活用するためのものです。そこで具体的な活用方法として、飲食関係の施設や民泊など、いろいろ検討し、行き着いたのがミュージアムと別院だったんです。

皇族訪問に合わせた増改築

そのご縁で、大正13年（1924）には、朝彦親王の息子にあたる久邇宮邦彦王と伺子妃、同じく息子の多嘉王、孫の信子女王の4名が、龍田神社参拝の際にお泊まりになりました。その皇族訪問にあわせて増築や改修も本館の特徴の一つになっています。

「**建物の数が多くて、蔵が五つもあるんですね。**」

廣部 中央の主屋が文化11年（1814）築ですから、200年以上経っています。本来はヨシ葺き屋根でしたが、それを復元するのは将来の維持管理が大変なので、銅板葺きになっています。

※3 登録有形文化財

文化財登録制度に基づいて登録された築50年以上の歴史的建造物。登録記念物は、同制度により登録された造成後50年以上の庭園、公園などの名勝地。

※4

久邇宮朝彦親王（1824～1891）日本の皇族。香淳皇后（昭和天皇后）の祖父。

江戸時代に敷地内に5棟の土蔵が建てられて、明治・大正・昭和初期と、主屋につながる建物が増築されていきました。

「**それでは、それぞれの建物をご案内いただけますか。**」

廣部 どうぞ。入口から入ってすぐを「見世（店）の間」といいます。

そこから左手奥に進むと、「新建」（別名「浴月楼」）につながっており、途中に床を一段高くした「上段の間」（6×7ペーシ）の写真と平面図を参照。以下同）と呼ばれる部屋があります。普通の商家にはないので、久邇宮家来訪に合わせて整えられたものです。

来館者は自由に写真をお撮りいただける写真スポットになっています。

「**この部屋の電灯は、もとからつてい**

たものですか。

廣部 そうです。他の電灯類の中には、時代に合わせて古いものを探してきて取りつけたものもあります。

廊下からは庭が見渡せます。

廣部 登録記念物になった庭園は、長浜出身の著名な作家、勝元宗益（鈍穴）の作と伝わっています。

当初はこの庭も落ち葉で埋まって、飛び石がわからないような状態でした。もう発掘作業のような感じで、徐々に姿を現して15年かけてすばらしい庭になったものです。ウメの木などもずいぶん古木なので、元氣です。ドウダンツツジもなかなかこんなに大きなものは希少で、ご存じの方はびっくりなさいます。秋の紅葉の時には真っ赤になります。

灯籠では、一番奥の大きな春日灯籠が明治期に滋賀県の名石工として活躍した西村嘉兵衛の作です。初代の初期の作で、とても貴重なものです。

廊下に近い、この石は何ですか。とてもモダンに感じますが。

廣部 これは、橋杭石^{はしこうし}という、三条大橋や四条大橋の橋脚に見立てた手水鉢^{てすいぼち}です。本物の橋脚が手に入れば一番ですが、これ



↑増築されたトイレに残されていた
国産最古の水洗便器

は、模して蹲^{つまた}にしたものです。偉い方が来られると、お供の者が水をくみ上げて、ここで手を清めました。そういう蹲として定形された役割の石が配置されています。

廊下を奥へ進むと久邇宮家がお泊まりになるために増築された風呂^{ふろ}とトイレがあります。この便器はじつは国産最古の水洗便器なんです。最初は海外から洋式の水洗トイレが輸入されていましたが、明治の終わりごろに、日本の建物用に和式の水洗便器が試作されます。大正時代には、TOTOの前身にあたる日本陶器が水洗便器を発売しました。

平成29年（2017）に建物の建築年代の特定に役立つだろうと思い、TOTOに問い合わせたところ、北九州市にあるTOTOミュージアムの方が調査にお見えになったんです。小便器についていた商標マークから東洋陶器になる前の日本陶器という会社だった時期にあたる大正3〜6年（1914〜1917）の製品だとわかりました。大便器についても同時期のものだった。

煎茶のお茶室となる廊下座敷と新寮

続いて、新建の南に奥庭にせり出すようにしてあるのが「廊下座敷」^Lですね。

廣部 ここは、南蔵と文庫蔵への通路を兼ねたお茶室です。別名「槐庵^{かいあん}」と呼ばれていました。お茶室といっても、抹茶^{matcha}ではなくて、煎茶^{せんちや}のお茶室なんです。

現在では煎茶にも茶道の流派が存在することすらご存じない方が多いかもしれません。が、江戸の終わりから大正時代ぐらいにかけては非常に流行したのです。ここに面する奥庭も煎茶風のお庭で、特徴として、侵食されてきた石灰岩や溶岩石などの奇石が用いられています。

奥庭の灯籠^Jは鎌倉から室町時代の作

※5 勝元宗益（鈍穴）（1810〜1889）

近江国坂田郡勝村（現長浜市）出身の作家。晩年は神崎郡金堂村（現東近江市五個荘金堂町）に移り住んだ。

※6 西村嘉兵衛（初代）（1850〜1915）

近江国滋賀郡南小松村（現大津市）出身の石工。二代目は大正期に、三代目は昭和期にそれぞれ活躍した。

※7 小杉五郎右衛門（1785〜1854）

神崎郡位田村出身の初代が江戸中期に行商を始めた近江商人。11代は中興の祖とされる。

ろうとのことです。TOTOにもこんな古いものは残っていないそうです。

そのそばの庭に置かれた一文字の手水鉢^Iは、久邇宮家から拝領したものだそうです。朝彦親王が門主をお務めになったこともある京都の青蓮院門跡にも、同じような一文字の手水鉢があります。

階段で新建の2階に上がるのです。

廣部 2階も久邇宮^{くわにのみや}一家がご休憩になったところで、「御座所^{ござしよ}」^Fと呼んでいます。椅子は蔵に残されていた当時のものを並べました。

で、もとは野洲市にある浄土真宗本願寺^{きんべん}の本山の錦織寺^{きんおき}にあったものと伝わります。近江商人の小杉五郎右衛門（11代）が錦織寺にお堂を寄進し、返礼として小杉家に伝来したものを松居家がいただいたのだそうです。

残念ながら一部が壊れたのか、別の灯籠の部材を寄せてあるのですが、全部そろってあれば文化財になっていることでしょう。

「廊下座敷」を抜けると、蔵の入口が二つ並んでいます。

廣部 主屋から見て東南の位置にある「文庫蔵」は一番豪華に、格式を持たせて作られた蔵です。掛け軸や屏風など、価値のあ

るものが収められていた蔵です。

その隣が「南蔵」です。この蔵の特徴は、床下に「万両庫^{まんりょうぐ}」**M**と呼ばれる石造の隠し金庫が設けられていることです。小判の千両箱ではなくて、丁銀^{ちやうぎん}という銀貨を入れる千両箱が10箱収まる構造になっています。見た目が立派な隣の文庫蔵ではなく、わざと簡素な南蔵に作られたのがおもしろいですね。泥棒を欺くための知恵です。

――再び主屋にもどってきました。

廣部 次に、築200年の主屋の屋根裏**G**

をご覧くださいと思います。

――**屋根裏というの是一种、特別な空間という感じがありますね。**

銅板葺きの内側に燻^{いぶ}されたヨシや柱がそのまま残っています。おそらく、ここ100年ぐらいは葺き替えていないでしょう。ここに摩訶迦葉^{まかしょう}という、お釈迦様の十弟子の一人の像を置かせていただいています。

衣食住にとらわれず、清貧の修行をおこなった尊者と、飾り気のない屋根裏がなん

となくリンクします。

廣部 次が「新寮」（表紙、2ページ写真）

と呼ばれる建物で、昭和8年（1933）築と一番新しい建物です。それでも雨漏れやシロアリのために、床板を張り替えています。天井は中央部を一段高くした折上格天井^{おりあがり}という日本古来の様式を模したもののなのですが、デザインがなんとなく洋風に感

※8

摩訶迦葉（紀元前5世紀ごろ）釈迦の入滅後、教団を指導した。大迦葉、迦葉とも。



A



B



C



D



E



F



じられてオシャレです。

——この建物は、どういう位置づけのものだったのですか。

廣部 新寮は、「新茶寮」という意味で、お茶に関わる場であったのだらうと思います。奥庭をはさんで向こうが煎茶のお茶室である「槐庵」なので、待合にあたる部屋だったようです。飛石依いに蹲へ至って手を清め、お茶室へ入るという手順だったでしょう。

奥の南面にはハート形の窓があります。このハート形は猪目文様^めといって、日本建築では古くから使われている文様です。火事除けや魔除けの意味があるものです。

いまは当館で一番の写真スポットとなっています。鏡を利用したりフレクション写真も人気で、SNS映えすると大変評判です。

——続いて、入口から見て右手（西）の方
向へ進みます。

廣部 教林坊の別院にあたりますので、北蔵の一角に仏堂にあたる部屋を設けました。教林坊から聖徳太子像や仁王像を遷座し、縁結びや商売繁盛を願う大きな一木造りの大黒様を新たにお迎えしました。



↑大黒天像の背後の厨子には教林坊から遷座した聖徳太子像を収める

——仏様の前を抜けて、新蔵が展示室K
になっています。

廣部 人力車は五個荘の方が寄付してくださったもので、明治の終わりから大正ごろ、

誰もが神聖なものに触れたと感ずる空間づくり

——廣部さんは、もともと文化財にお詳しく
あったのですか。

廣部 昔から好きではあるという感じでした。ですから、建物にしても、庭にしても、あとからいろいろ調べて知識を得たという感じですね。私の師匠が美術品に造詣が深い方で、本物を見る目を養えたということ、いろいろ手ほどきを受けました。

——今年4～6月のオープン時期は、いか
がでしたか。

廣部 インスタグラムなどで写真を発信したところ、かなり反応があり、たくさんの方にご来館いただきました。

——ハート形の窓の写真ですね。

廣部 はい、カメラ好き、写真好きの方が多かったですね。もちろん開館して一番初めは地元の方がずいぶん来てくださいました。時々、大工仕事や工事の音が聞こえてきていても、中がどうなっているのかわからなかったそうで、奥行きに驚かれました。「よくぞ復興してくださいました。地元の誇りです」と喜んでくださる方が多く、修復した甲斐^{かい}がありました。

——今後の開館予定は？

廣部 今年も教林坊では紅葉のライトアップなどをおこないます。当館も教林坊の公開期間とほぼ同じ、春と秋の開館ですので、教林坊から当館へ、あるいは当館から教林坊へと巡っていただければと思っています。

——恐縮ですが、私は教林坊へうかがった
ことがありません。

廣部 ここから車で約10分ですが、山すそ

実際に使用されていたものです。こちらの櫓時計は、彦根城の槻御殿^{けみごてん}にあったものと伝わっています（9ページ参照）。他にも貴重な調度品を展示しています。

にあり、紅葉の庭園が広がるお寺です。庭には大きな岩があり、別名「石の寺」と称されています。白洲正三さんの『かくれ里』では、古墳の石室に用いられた石を転用したのだらうとされているのですが、専門家の方の見解では、磐座^{いわゐ}といって、古代から続く巨石信仰の名残^{なごり}と考えられています。聖徳太子自作と伝わる石仏が安置されている岩屋は「本尊靈窟」と称され、斜めに落ちた巨石がふたをして洞窟のようになっています。

教林坊では、この境内全体を「空間説法」と呼んでいます。仏様の教えというものが、文字や言葉によるものだけではなく、その場所を訪れただけで知らず知らずのうちに体の中に入ってきます。

実際に訪れていただくとよくわかると思いますが、自然と頭が下がるような、そこそ日本人だけではなく海外の人でも誰にでもわかる、神聖なものに触れたと感じる空間づくりを心がけています。じつは、その延長に当館もあるわけです。

——なるほど。

ですので、お寺とミュージアムはまったく関係がないと思われるかもしれませんが、お寺も博物館も何となく心が落ち着く癒しの空間という点では、ある意味共通しています。

——本日はお忙しいところ興味深いお話を
ありがとうございました。

(2023.9.14)

二挺天符櫓時計

伝彦根城櫓御殿什物

マーチャントミュージアム 館長・キュレーター 廣部光信

江戸時代の時刻制度は現在とは異なり、不定時法といって、夜明けから日没までを6等分、日没から夜明けまでを6等分したものでした。つまり、同じ昼間の1刻（約2時間）でも、夏は長く、冬は短くなり、同時に夜間の1刻の長さも変化したのです。

戦国時代に宣教師らによってもたらされた機械時計は常に一定のリズムを刻む定時法によるものでした。彼らの指導のもとに日本でも時計の製作が始まりますが、これを不定時法に合わせるために考案されたのが、二挺天符と呼ばれるこの時計です。ゆっくりと時を刻む天符（振り子のような役割）と早く時を刻む天符が、朝夕で自動的に切り替わる画期的な装置がついているのです。

この時計は、もともと彦根城の櫓御殿にあったと伝えられます。明治13年（1880）に御殿の部材とともに拝領したとの書付があります。

江戸時代に作られた時計を、和時計とか大名時計といいますが、本作は台の形から櫓時計と分類されます。櫓時計としては大型で、総高150cm、機械高50cm、機械幅19cmの堂々としたものです。

櫓部分は黒漆で仕上げられ、内部には動力となる鉛製のもりがぶら下がりますが、木製枠に板ガラスがはめ込まれた、火屋と呼ばれる時計の被覆が残るのも貴重です。

機械部分は真鍮製で、時刻だけでなく日付や六十干支も表示できるトリプルカレンダーになっています。また文字盤周りや外枠の扉にはトケイソウをモチーフとした美しい模様が毛彫りされており、井伊家の御殿を飾った「大名時計」と呼ぶにふさわしい華やかさがあります。

日本で独自に発展したこうした和時計は、日本の精密機械工業のルーツといえ、大変優れた工芸品であり美術品であるといえるでしょう。



第92回企画展 写真展 50年前の琵琶湖・堅田

—大西岬人がみた自然と営み—

開催中～ 11月19日(日)
大津市歴史博物館



大西岬人「琵琶湖の船の船先
の力強さ」(昭和45年)

昭和41～46年(1966～1971)、東洋紡績堅田研究所に赴任していた大西岬人氏は、休日を利用して堅田周辺の風景や琵琶湖の風景を数多く撮影しました。

本展では、大西氏が撮影した昭和40年代の堅田の写真約80点を展示するとともに、現在堅田・仰木に暮らす人々のインタビューを交えながら堅田の魅力と変遷を紹介します。

入館料：一般330円、高大生240円、小中生160円
休館日：月曜日

■スライドトーク

10月18日(水)、11月8日(水)

14:00～(40分程度)

講師：木津勝(本館副館長)

会場：博物館講堂

定員：100名(当日13:30から受付開始。先着順)

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

特別企画展 近江・聖徳太子伝承社寺の美術 —地域に根付いた文化財たち—

開催中～ 11月26日(日)

観峰館

東近江市の百済寺、瓦屋寺や石馬寺、近江八幡市の願成就寺や長命寺など、東近江地域には、聖徳太子が開創に関わったとする伝承を持つ社寺が数多くあります。

聖徳太子遠忌1400年という節目にあたり、東近江地域に所在する聖徳太子伝承を持

大の拠点となつて、多くの門徒が集いました。

同寺に伝わる「本福寺跡書」をはじめとする中世記録は、寺史だけでなく堅田の歴史そのものを語る上で欠かせないものです。本展では、これらを含めた未公開・未整理の歴史資料などの貴重な宝物を一堂に集め、室町時代から現在につづく本福寺と堅田の歴史を紹介します。

入館料：一般800円、高大生400円、小中生200円
休館日：月曜日

■企画展記念講演会

「本願寺蓮如と堅田本福寺」

11月11日(土) 14:00～15:30

講師：岡村喜史氏(本願寺史料研究所上級研究員)
申込締切：10月27日(金)

「中世近江の女性と真宗

—絵系図に見る女性と子ども—」

11月18日(土) 14:00～15:30

講師：西口順子氏(相愛大学名誉教授)

申込締切：11月2日(木)

参加料：各回500円 定員：各回100人

■企画展関連講座

「本福寺と真宗の美術」

11月3日(金・祝) 14:00～15:30

講師：柘植健生(本館学芸員)

申込締切：10月20日(金)

「近現代史のなかの親鸞と蓮如」

11月4日(土) 14:00～15:30

講師：近藤俊太郎氏(本願寺史料研究所研究員)

申込締切：10月20日(金)

参加料：各回500円 定員：各回100人

以上のお申し込み方法：当館ホームページ上のweb申込(れぎはく講座・講演会申込みフォーム)、またはハガキでお申し込みください。ハガキの場合は、普通ハガキに講演会・講座名と日付、参加希望者全員の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入して、締切日必着でお送りください。

送付先：〒520-0037 大津市御陵町2-2

■ギャラリートーク

10月19日(木)・26日(木)、11月9日(木)・

16日(木) 14:00～(30分程度)

会場：企画展示室 A

参加料：無料(当日有効の観覧券をご提示ください)

お問い合わせ先：TEL 077 (521) 2100

常設展

千年の秘仏と近江の情景

開催中～ 11月19日(日)
滋賀県立美術館



重要文化財《大日如来坐像》
平安時代 正福寺(湖南市)

滋賀県立琵琶湖文化館がお預かりしている貴重な文化財の中から、正福寺の仏像を中心として、豊かな文化を育んできた滋賀の情景をあらわした作品を滋賀県立美術館のコレクションとともに展示します。

特に正福寺の本尊大日如来坐像(重要文化財)は国内最古級の胎藏界大日如来像で、厳重な秘仏のためその公開は33年ぶり、寺外では初の公開となります。

入館料：一般540円、高・大学生320円
休館日：月曜日

■学芸員ギャラリートーク

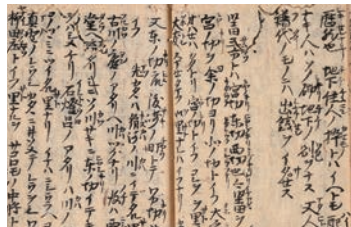
10月18日(水) 14:00～15:00

お問い合わせ先：TEL 077 (543) 2111

親鸞聖人生誕850年記念企画展(第91回企画展)

近江堅田 本福寺

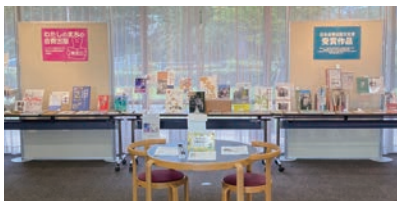
開催中～ 11月19日(日)
大津市歴史博物館



大津市指定文化財《本福寺跡書》
室町時代 本福寺蔵

堅田の夕陽山本福寺は、本願寺中興の蓮如上人が逗留し、湖西地域における教線拡

わたしのまちの自費出版



東近江市立湖東図書館での展示風景

守山・長浜・米原市立図書館に引き続き、滋賀県ゆかりの自費出版物を展示します。

あわせて、前回(第25回)までの「日本自費出版文化賞」(主管:NPO法人日本自費出版ネットワーク)受賞・入選作品もご覧いただけます。

※手にとってお読みいただけますが、貸し出しは館の所蔵図書のみとなります。

開催中～ 10月26日(木)
会場 東近江市立湖東図書館

巡回展記念講演

『雪辱 真説・井伊直弼』出版裏話

10月21日(日) 14:00～15:30 (13:30開場)

講師: 野村しづかず氏 (東近江市大沢町在住)

会場: 湖東図書館 視聴覚ホール

料金: 無料 定員: 30名 (先着順)

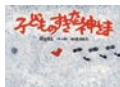
申込み: 淡海文化を育てる会 (サンライズ出版内)

TEL 0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720

Email: info@sunrise-pub.co.jp

11月2日(木)～11月30日(木)
会場 東近江市立永源寺図書館

同時開催

西條由紀夫
『子どものすきな神さま』
ミニ原画展

「日本自費出版文化賞」についてはこちら→



小社が承った書籍を応募される方はご相談ください。
さまざまなアドバイスをいたします。

自費出版に関するお問い合わせ
サンライズ出版 TEL 0749 (22) 0627

韓国公州市武寧王陵から出土した獣帯鏡と
同型鏡であると知られています。

今回の展示では、この4面の同型鏡やさ
まざまな資料から、継体大王が活躍した6
世紀前半の国内情勢について考えます。

入館料: 大人600円、高大生350円、小中生250円
休館日: 月曜日、11月24日(金)

■記念講演会

「三上山下古墳出土獣帯鏡と
大岩山古墳群」

10月28日(土) 14:00～16:00

講師: 花田勝広氏 (元野洲市文化財保護課長)

「継体大王と百濟武寧王

—継体朝の対外関係—」

11月11日(土) 14:00～16:00

講師: 大橋信弥氏

(元滋賀県立安土城考古博物館学芸課長)

受講料: 無料 (要入館料)

定員: とともに当日先着80名

■展示解説

11月18日(土) 14:00～

お問い合わせ先: TEL 077 (587) 4410

第26回日本自費出版文化賞に
入選!

山東圭八著『戦国近江伝 長比』

第26回日本自費出版文化賞(日本グラフィックサービス工業会主催、NPO法人日本自費出版ネットワーク主管)の最終選考が2023年9月6日(水)終了し、大賞には、綿谷正之さん(奈良県奈良市)の『墨に五彩あり—墨の不思議な魅力—』が選出されました。部門賞7点、特別賞(協賛各社賞など)7点も選出されました。第26回の表彰式は、2023年11月11日(土)に東京都・千代田区のアルカディア市ヶ谷で開かれます。

サンライズ出版制作の応募作品では、〈小説〉部門で山東圭八著『戦国近江伝 長比』が入選しました。

好評
発売中

つ社寺が所蔵する
太子像や書画など、
美術工芸の名宝を
一堂に展示します。

入館料: 一般1500円、
高校生・学生1000円、
中学生以下100円

休館日: 月曜日

■記念講演会

「東近江地域文
化財の再検討」

10月29日(日)

13:30～15:00

講師: 和澄浩介氏

(滋賀県立琵琶湖文化館 主任学芸員)

参加費: 無料 (要入館料)

定員: 50名 (要予約)

■土曜講座

「近江の太子信仰とは何なのか?」

11月18日(土) 13:30～14:30

講師: 寺前公基 (本館学芸員)

参加費: 無料 (要入館料)

定員: 20名 (要予約)

お申し込み方法: お電話もしくはホームページの
メールフォームからお申し込みください。

お問い合わせ先: TEL 0748 (48) 4141

開館35周年記念企画展

四面の鏡

—海を越え、つながる王—

開催中～ 11月26日(日)

野洲市歴史民俗博物館(銅鐸博物館)



三上山下古墳出土獣帯鏡(所蔵・写真提供 九州国立博物館)

野洲市三上山下古墳から出土した2面の
獣帯鏡は、群馬県高崎市綿貫観音山古墳と

淡海文庫46 太田浩司著『浅井長政と姉川合戦 増補版』

浅井長政と姉川合戦

その繁栄と滅亡への軌跡

11月12日(日) 14:00 ~ 15:30 (13:30開場)

「長政軍は姉川の合戦で大敗していない」「浅井・朝倉同盟は存在しなかった」これが史料から読みとれる真実である。大河ドラマ「江」で時代考証を務めた著者が、新たに「浅井氏家臣の下坂氏館跡」と「地形・絵図類から探る姉川合戦」の論考を加えて、小谷落城450年を機に世に問う書籍に準じて語る。

講師 太田浩司（淡海文化を育てる会 代表世話人）

会場 臨湖 多目的ホール（滋賀県長浜市港町4-9 JR長浜駅西口から徒歩10分）

料金 淡海文化を育てる会会員：無料 / 一般：500円（資料代）

申込み・問合せ 淡海文化を育てる会（サンライズ出版内）

TEL0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720

Email : info@sunrise-pub.co.jp

出版記念
講演会

近江の祭り行事 4

近江湖南のサンヤレ踊り
近江のケンケト祭り長刀振り滋賀民俗文化財保護ネットワーク監修／辻村耕司 写真
A5判並製本 総128頁 2640円（税込）

都から近江に伝来して根づいた災厄防除の「風流踊」。ユネスコ無形文化遺産への登録を記念し、色とりどりの踊りの姿を一挙紹介。

土山歴史民俗資料館にて瀧樹神社のケンケト踊り写真展開催中（～2024年3月10日）

ぼくら滋賀っ子 あかねいろの宝箱

滋賀県児童図書研究会 編著
A5横変並製本 総168頁 1540円（税込）

『滋賀の子どものたからばこ』から始まった童話集の6冊目。祖母と守山のホタルの出会いを追った「ほたるの家」、閉山した鉱山跡を訪れる「どうよ！ 土倉鉱山」など13編。



旅日記 歴史や文化を訪ねて

白井庄作 著

A5判並製本 総98頁 非売品

問合せ 守山市小島町1682-6（著者）

定年退職後、以前から興味のあった名所・旧跡を訪れる時間ができた著者が、滋賀県内、県外、インドで印象に残った景色や建造物を撮影した思い出のアルバム。（2023.8.10刊）



乗り鉄とときどき城巡り 巻之八 中国編

佐渡 滋 著

A4判並製本 各総128頁 非売品

問合せ 大阪府吹田市五月が丘東6-B503（著者）

城好きの著者が、鉄道に揺られて各地の城跡を巡った写真紀行。巻之八は岡山・広島・鳥取・島根・山口の各県を紹介した中国編。（2023.9.28刊）



〈続〉ふるさとつれづれ散歩

若林憲秀 著

A5判並製本 総112頁 非売品

問合せ 蒲生郡日野町音羽429（編者）

日野町の東部にあたる西大路校区の歴史や民俗、文化財を紹介した単行本の続編。熊野区で行われる「烏帽子の儀」、文事にも優れた音羽城主・蒲生貞秀のことなど。（2023.9.13刊）

永源寺惟喬伝説 木地師の神さま

よしの
丁野永正 著

四六判上製本 総208頁 頒価1500円

問合せ 東近江市建部瓦屋寺町134-25（著者）

永源寺地域に残る木地師と惟喬親王にまつわる伝説をもとに、前半では歴史解説、後半では小説形式によって小椋姓の幼友だちとともに各地の史跡を訪問。（2023.10.17刊）



表紙写真 新寮の猪目書院窓

編集後記 ミュージアムとして残されることになった松居久右衛門旧宅は、児童書の老舗出版社・福音館書店の経営者であり、編集者として多くの絵本作家を世に出し、昨年11月に亡くなられた松居直さんの母・松居すみさんの生家にあたります。五個荘図書館には直さんが寄贈なさった絵本による「松居すみ文庫」があるのだとか。その手がけた絵本は、誰もが一度は目にしたことがあるはず。私は佐藤忠良画の『おおきなかぶ』が印象深いです。⊕

Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先